

「死の害を形而上学的に考えること」

鈴木生郎（鳥取大学）

人生の意味や死の害といったいわゆる「実存的な」テーマを論じることは、分析哲学において珍しいことではなくなった。また、他の哲学分野の知見を応用する形で、こうした話題に取り組む試みも多くみられる。（たとえば、本発表の主題となる死の害の問題について言えば、比較的以前から形而上学の知見を持ち込むことが標準化している（Cf. J. M. Fisher (ed.), (1993), *The Metaphysics of Death*。）とりわけ最近になってこうした話題に関する関心が分析哲学においてさらに高まっていることは、関連する単著やアンソロジーが立て続けに出版されていることから明らかだろう。

こうした状況に対する発表者自身のスタンスは、ごく楽観的なものである。分析哲学において実存的な主題が論じられることについては、次の二つの理由から自然な流れだと考えている。すなわち、分析哲学は扱う話題の多様化と拡散の傾向を強めており、現在の状況もこうした不可逆の流れの一例だと思われること、第二に、人生の意味や死の害といった実存的な主題に注目が集まりつつあるのは、人生に含まれる価値や害についての一般的探求が進んだことによる自然な帰結であるように思われることである。また、発表者は、実存的な主題に他分野の知見を応用することの意義についても肯定的に捉えている。その理由は、一つには、こうした実存的な主題に関する研究はまだまだ発展途上の段階にあり、他の分野の知見を生かせる余地が多分にあると考えるからである。そしてもう一つには、既存の研究の単純な応用が実存的な主題の重要な側面を捉えそこねているように思われるとしても、すぐに新たな研究が出現し、そうした歪みは矯正されるだろうと信じるからである。

とはいえ、当然次のような疑問は生じるだろう。分析哲学が人生の意味や死の害悪のような実存的問題を扱うとして、そのことはこの話題にどういった理解の進展をもたらすのだろうか。こうした試みは、私たちが抱く実存的不安にどのように答えてくれるのだろうか。あるいは、分析哲学において発展した価値論、メタ倫理学、形而上学等々の成果を、実存的な主題に持ち込むことには具体的にどういった意義があるのだろうか。それはすでにわかっていることを単に他分野に当てはめるだけで、実存的な主題に対する実質的な貢献になっていないのではないだろうか。

もちろん、本発表でこうした広範な疑問のすべてに答えることはできない。本発表の目標は、こうした疑問のごく一部に答えようとするささやかなものである。すなわち、発表

者が目指すのは、自身が専門とする現代の分析的形而上学の知見を「死の害」という特定のテーマに応用することによってどのような意義があるかについて、自身の経験を踏まえつつ論じることである。具体的には、本発表は次のことを論じる。すなわち、(1) 死の害について発表者自身が論文（鈴木生郎 (2014)『死の害の形而上学』）を発表した経験からも、さらにその後の研究動向を検討した結果からも、形而上学の知見を死の害の問題に応用することには、十分な意義があると考えられること、(2) K. Hawley (2014), “Persistence and Time”などを参照しつつ、こうした意義をより一般的な観点から明確化できること、(3) 同時に、形而上学の知見を実存的テーマに応用することには、まさに形而上学そのものについても有益でありうることの三点である。また、以上の検討によって、様々な分野を専門とする方々に、実存的な主題に対する関心を広げることができればと思っている。というのも、こうした課題には、他分野の連携が不可欠だと考えるからである。